

心のバリアフリー

栃木県 大平中央小学校 6年 近藤 紘輝

病院の待合室で診察の順番を待っていたときのことだ。そこは大学病院で、待合室には座りきれないほどの患者さんが待っていて、看護師さんも忙しそうに走り回っていた。

診察室の扉の向こうから、先生が患者さんを呼ぶ声が聞こえた。ふと顔を上げて見ると、車いすに乗ったおばあさんが、診察室のスライドドアを開けようと苦戦していた。ドアはおばあさんの腕の力で開けるには重いらしく、なかなか開かない。(誰か付きそいの人はいっしょにいないのかな) と思っていると、診察室の奥の先生からもう一度名前を呼ばれた。おばあさんは、本当に困っているように見えた。

ぼくはとっさに立ち上がり、

「今、開けますからね。」

と言ってドアを開け、おばあさんの車いすを診察室の中まで押した。おばあさんはホッとした様子で、にっこりと笑顔を見せて、

「ありがとうね。」

と言った。ぼくは先生からもほめられた。

おばあさんがドアを開けられないのを見たとき、誰かほかの人が助けないか、手伝おうとしても断られるのではないか、という考えが頭の中をよぎり、ぼくは一瞬迷ってしまった。でも思い切って手伝ったことで、おばあさんの笑顔を見られて、自分までうれしくなり、心の中がほっこりと温くなるのを感じた。

友達がケガをして足が不自由なとき、荷物を持ったりドアを開けたりするのは自然にできる。その一方で、見知らぬ人が困っていたらどうだろう。声をかけて手を貸すことは、思いのほか勇気が必要だ。

しかし、必ずしも人に助けを求めてくる人ばかりではなく、自分でがんばろうとして、声には出さずに苦しい思いをしているかもしれないのだ。だから、相手の立場に立ち、その人の気持ちを想像し、相手のためになる行動を起こすことは重要だ。たとえ知らない人に対してでも、人間同士のつながりを大切に思う心こそが、小さな親切の根っこになるのではないかと思うのだ。

世の中を見渡してみると、公共施設にはスロープやエレベーターが設置され、車いすを使う人の移動はしやすくなった。また点字ブロックや音声案内は、目の不自由な人が安全に通行したり、状況を正しく理解したりする助けになっている。一見するとバリアフリー化されて、ハード面で充実しているように見えても、ハンデを背負う人たちにとって本当に生きやすい世の中になったのだろうか。

本当に必要なものはただ一つ、「みんなの心のバリアフリー」なのだ。勇気を出して声をかけ、手助けをする。そんな「小さな親切」は、された人が笑顔になれるだけでなく、自分も幸せな気持ちもらえる「やさしさの魔法」なのだと思う。

ぼくはこれからも、困っている人に「お手伝いしましょうか」と、積極的に声をかけていきたい。一人ひとりがお互いを思いやり支え合うことで、やさしさが広がれば、笑顔あふれるよりよい社会を実現できると信じている。